

「ナツミカンの木の教材性(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

校庭の端にナツミカンの木がある。この木は、理科の学習にとって実に教材性が高く、さまざまな学年の学習に役立っている。



これが6年生の教室から見たナツミカンの木だ。栽培農家の木よりもかなり大きい。ケヤキの大木の影にあるのだが、全体的に日当たりがよく、一年中緑色の葉を繁茂させている。ミカンは冬の果物だが、ナツミカンは今の時期に熟した果実をつけている。名の通り「夏蜜柑」なのだ。



このナツミカンの木は、葉も花も果実も、子どもの手が届く高さにある。子どもたちの一番の目当ては、もちろん果実だ。時々木の下に落ちていて、運が良ければ個人でゲットできる。子どもなりのルールが存在するようで、枝からもいで持ち帰る子どもはいない。



ナツミカンは常緑樹だが、クスノキやスダジイ同様、この時期には新しい葉をつける。同時に白い花をたくさんつけて、ジャスミン茶と同じ匂いを漂わせている。クマバチが好んで吸蜜し、送粉しているのを見かける。



花弁が落ちると、雌しべと下部の子房が残り、すでに若い果実のような形状を見せるようになる。



ナツミカンは面白い。前の年から育っている果実が残っているうちに、もう花を咲かせている。これも「花から実へ」という学習に役立つ光景と言える。